
sky ash

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s k y a s h

【Nコード】

N 2 4 5 9 Y

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

灰色の世界。青空は見えなくなって久しく、人々は太陽の下を恐れた。

環境破壊の末に行き着いた世界は化け物の徘徊する地獄。シンシと降り積もる、灰色の雪。少年少女たちはただ、明日を生きるために戦う。

*グロあり

*ヒロインは二章より登場

* B L 風味あり、
N L

灰色の雪と呼ばれる化学物質の散布により、空気は汚染され建物は徐々に腐敗した。

過去、世界へ危機が迫った時に建築された人工的熱遮断塔（Artificial Solar Energy Seclusion）——通称AES塔。だが一時の救済でしか無く、それは更なる悲劇を呼び起こした。塔から発される化学物質AESが放射性物質を孕みRadiation AES——RESへ変化し、有害物質となつて世界を包み込んだのだ。雪のように深々と舞い落ちる灰は見た目の綺麗さとは裏腹に人々を安全から遠のかせた。RESに感染した生物の凶暴化状態Loss Sense——LSによる死傷者の被害と広がる感染。しかし人類は人口を激減させながらも生きる術を見つけた。都市に張られた防壁の外に出られないという制限を負いながらも生き残ることができる術、それが移動・転移型の都市。そのことにより他の都市との交流は一部手段を除き絶えたが、人類は外側にLSという敵をもった状態で均衡を保つようになった。安全ではない世界、明るくない未来。それでも人々は生きていた。一つの光に希望を寄せて。それが犠牲の上での上辺だけの光だということを知らず、人類は再び危機を迎えていた。

「ここが、シンクレス……」

踏みしめた土がジャリツと音を立てる。

閑散とした都市を散策する人物は「さすがにでかいな」と呟きを残した。

日中の明るい朝の日差しが彼の闇に馴染んだ眼を眩ませ、色素の薄い異色の眼を細めたさせる。『都市』で作られた人工的な光だから光量を気にすることなく見上げることが出来た。

人工的な光でさえ見上げるのが久しぶりの彼には、太陽の懐かしみを感じさせる。

この『都市』は他の『都市』と同じように明るい。陽の世界だ。だが、『世界』は俺が辿る運命のように暗い、灰色の世界だ。

『都市』では『都市の中』だけが“彼ら”の世界。切り取られた、偽物の世界が広がる。それでも今は“ここ”が人間の世界で、一樣に鳥籠に住む。俺も、それに捕らわれたままだ。

学園都市シンクレス——それがこの『都市』である。

ここが学園都市である以上、住民は一日の殆どを『学校』で過ごす。通常であれば太陽は頂点へと昇る頃合である今、もちろん人影は無い。街中は当然として空っぽ。皆が学校にいるはずだ。例外はない。だが彼は居た。

都市に降り注ぐ明るい光とは反対に、彼は自身を覆う暗い闇から抜け出せずにいた。

逃げて、逃げて、そしてここまで来た彼は自身で“負け犬”の名を冠す。

彼に繋がる影は後悔の荷を担ぎ、過去という錘を引き摺る。底を見せない黒は長く伸びていた。平穏が偽りの仮面と知る者たちが集まる場所。しかし、そこも楽園の一部でしかない。

本当の“果て”を知らぬ者たち。そうして、偽りの平穏に俺も身を浸す。

***要塞都市アキラム

「くっ——」

一人の脱走兵が荒い息を殺し、身を隠す。その一瞬後のことだ。武装した兵士が2人、双方向から来て辺りを警戒する。幾重にも重なった足音は夜の空間に冷たく硬質に響いている。

「いたかつ！」

「いいや、次は——」

奴らは無線で連絡を取り合い、徐々に網を狭めていく。ブザーは鳴り続ける。

多数の人員が投入され、危険度Aランクで警戒配備・索敵している状況。標的が見つからないのは彼が玄人であるからだ。

要塞都市アキラムの最高機密にあたる研究施設からの脱走。領内の軍基地で幹部に値する彼の實力。——相応して彼の日常は危険極まりないものであった。

命がけの毎日とこの場からの脱走……どちらの生存率が高いのか。彼が一般兵であるならば悩むことすらしない。どちらを選んだところで、天秤にかけた時点で両方に死が確定する。だが彼の實力は日々を生き抜かせる。命がけの毎日を際限なく続けるかこの場所からの脱走をするか。彼にとっては後者の方が格段、決断に相当するものがあつた。

兵士は通信を終えると去って行った。自分がここに居ることを知ったらどんな反応をするのだろう、と考え苦笑した。気を緩める間もなくその場を離れる。また隠れる。その繰り返し。

目的地は近い。彼がいるはずの、約束の場所。

「急がなくちゃな」

誰にも聞えないように、けれど明確な強さを持ってそれは呟かれ

た。

世界は変わった。

人類の科学技術は発展し、皆が疑問を持つこともなく便利すぎるほどの生活を楽しむ。人類は快適な生活に思考することを止め、怠惰に走った。

一方、一部の政治家などは加速する温暖化への対策は明確な解決案もなく、未完成の企画書や打ち切られる開発ばかり。未来より、よりよい現在を選択したことによる罪だと覚悟をし、真綿で絞められるようにゆつくりと向かい来る恐怖を味わっていた。

秘かに、そして緩やかに、終焉へと一途を辿っていた世界に残された手段はただ一つ。

—— 人工的熱遮断気体層計画。

机上の空論と過去、幾度も批判され時の流れに忘れ去られた計画。熱遮断の性質を持つ気体を人工的につくり、人体に影響を及ぼさないよう人から離れた地域でそれを常時製造し続けるというもの。全てが機械によるものであり、監視カメラをつけて遠隔的に操作をする。

現在の技術ならば夢とはいわない。しかし失敗のリスクが大きい。万一、成功しても持続性もない、応急処置にしか過ぎない。成功確立なんてそれこそ低い。

それでも、迷っている暇も案もなかった。巨大な尖閣塔が常冬の山脈地帯に建築された。

人々は最善の対策・失敗時の対応を用意して計画を実行した。唯一成功を祈って。

かくして世界は二分の一、50%にも満たない成功を願い、—— 成功を遂げた。

だがそれは短い平穏だった。

人類は予想以上に早い終結に解決案なく再び暗黒の時代へと、更に絶望を味わう世界へと陥れられた。—— それはA E S塔と呼ばれ

たその小さな事故による、突然の暴走という形で。

だから人々は一つの答えを出す。——“英雄”“聖女”という名の『贅』を差し出すこと。

彼女がどんな風に生きたか、それを知るのは僅かだった。それが危機に向かう“第二”の救世主を生み出した。彼女の血縁者である一人の青年、彼もまた『犠牲』へと選ばれてしまった。

「行くのかい？」

尋ねる彼に答える。

「そう……、手配はしてある」

暗い表情。彼の立場もあるから俺が居なくなることは負担だ。

迷惑をかけたくなかった。それでも、これだけは譲りたくない。

「ありがとう。世話になったよ」

「いや、——私にはこれぐらいしかできないからね」

彼は幼い頃から俺を知っている。頻繁に会うことはなかったが、ここに来る前から随分よくしてもらった。両親のいない俺にも『父』のように思えた。

——大丈夫だよ。ちゃんと、戻ってくる。約束は守る。

そう言っても彼の悲しげな表情は変わることは無かった。

「許して欲しい、秋登。私が……」

「気にするなよ、あんたは悪くない」

そう言っても彼の罪悪感は募るだけだった。

「……なら、約束がもらいたい。最後に自由が、思い出が欲しい。

俺は——」

後悔や罪悪を感じて欲しいわけじゃない。ただ、ワガママを聞いて欲しいだけなのだ。

少しの間だけでも、外の世界を見たい、それだけ。

俺は今日、ここを出る。そして、また戻ってくる。

暗い闇の中、落ちていくために……もう一度、近寄れないほどの眩しい光を浴びに行くんだ。

今の俺は……先の見えない闇で途方に暮れてしまっているのだから。
灯籠を探してからでないと歩けない。思い出が、全てを象る礎とな
る。

『——変化は水がスポンジに吸収されるが如く、急速に広がった。

散布される物質、RESの被害は目に見えて鮮やかだった。体内蓄積量は個別に異なるが、人を含めた動物はRESを体内に取り込むと身体の硬化、強制的な暴力衝動、自失状態などの症状を起こす。

つまり凶暴化し他を襲う。例えると小動物であるウサギやリスが通常の熊程に巨大化し、生物学的にも言っても本来が考えられないほどに変態する。

それらを隔離、いや人類の立て籠もりとも言うべき状態へと事態は移行される。

都市はNon RESシステムの導入によりRESからの安全を図ったのだ。

——しかし、RES化し人類の敵となった生物たちLSの狂気からは逃れられない。世界はやはり絶望の只中にあつた。そこへ一つの希望が——』

プツ——ッ

映像が一時中断され、創つくは何事かとHMDを外す。他の奴らも同じく外していた。

学園都市シンクレス——そこでは日夜戦いが繰り返されていた。襲ばい来るLSに対抗するため生徒同士の試合が行われ、命を殺すための訓練をする場であり、そして何かを守るための力を養う場所だ。

しかし、今日に限っては戦闘の音は聞えない。二期制においての後期始まりの日。その日、彼らは一様に世界の成り立ちを聞き、知識の復習を行う。創も例外でなく、それに参加していた。

大きく開いた視界で改めてみる教室。視線を巡らせれば副担任の朝

日が扉のところで担任の雪時と話をしていた。

「ああ、はい。聞いていますよ。はい、分かりました。わざわざありがとうございます。先生」

雪時と話し終わった朝日は向き直り、皆がヘッドホンを外したことを確認して話し始める。

「今期より入学した生徒が来たので授業は一時中断して、紹介したいと思います。さ、入って」

朝日の後ろでドアがスツと開いて青年が入ってきた。

「っ」

ドクンと創の心臓が一際大きく拍動する。

先ほどまで映像を映していたスクリーンを背にして立った転入生は紅い瞳を持っていた。彼の容姿はひどく平凡で、肩につく長さの黒髪と瞳の色以外には特徴がないくらいだった。細い腰に巻かれた金属ベルトや指に嵌められた指輪、服の中に納められていると思しきペンダントのチェーンが見え、大人しい風貌に申し訳程度の印象を与えるぐらいか。何処にいても埋もれ、紛れてしまう特徴の無い青年。けれど創は彼を見た瞬間からある人物を思い浮かべていた。

昔見た人物を思わせる雰囲気。だがその瞳は記憶と被らない。無感情に瞳を彩る紅は珍しい色合いだ。一度でも会えば忘れるわけがない。記憶には誰一人それを持たない。見覚えがない。

別人なのか、同一人物なのか。判断しようにも、今の創にはその材料がなかった、

「秋橋 あきはし 涙だ。 なみ よろしく」

ガツンと頭を殴られたような衝撃を受けた。記憶の声が反響するように、頭を揺らす。その存在は新しい季節の到来を告げるように創には感じられたのだった。

意図的に造られた笑顔がそこにはあった。けれどその瞳は寂しげに揺れ、絶えることなく風が吹き荒び、その色は乾き褪せる紅葉の傷

色を現していた。

彼はその情動を一瞬にして消し去った。瞳はどこも見えていない。感情なく、虚ろへと変化する。初めて会った彼に何故こんなことを思うのか。彼をかつての親友と決めかかる己に問う。余りにも違うと否定するのは簡単だ。しかし——記憶の中の人物だと、直観させた。記憶は鮮明だ。けれど肝心な顔の部分だけ、靄がかかったように思えない。それが創にはひどくもどかしい。

ガヤガヤと皆が席を立ち移動する休憩時間に俺へと声をかけてくるものがいた。

「おいっ……!!」

急に捕まれた腕を反射的に振り解いて振り返る。乱雑な扱いにしかめていた眉がその人物を目にして更に険しくなる。しかし男はそのことに気付かず、そして他も気付かない。

声をかけた側と声をかけられた側の2人を退けて人の波は早々に四角い箱から流れ出ていった。生徒の波に乗らなければ転入生という存在は次の授業も何も知らず、どうすることも出来なくなる。俺は前の時間は移動教室だったので教室の場所すらわからない。教師も少し気を使ってくればよかったのに、と恨みがましく思うのも無理ない。そんな時に事情も考えず声をかける奴も最悪だった。初日に、しかも数時間も経たず目を付けられるなんて。

「戻って、きたのか……」

目の前に立つ男は呟く。信じられない、とでもいうような不安定な声。

先程は俺の自己紹介のみをし、授業は再開された。だから俺にはまだ知り合い、声を掛け合ったクラスメイトなどいない。けれど男は声をかけてきた。

そして俺は、その男には見覚えがある。——以前からの知り合い。それでもこの場所で会うには不適格で、同時に“秋橋 涙”の知り合いでない。初対面だった。

「何の話」

感慨もなく、淡々と返した言葉に男の感情が高ぶったのを感じた。その端正な顔立ちに感情が馴染み過ぎている。表情が出やすかったいや、顔全体で感情を表しているといっても過言ではないほどに、

表裏がなかった。

「——っ忘れたのか？」

傷ついてみせる男の表情に、揺れる瞳に、心が粟立った。しかし、
「俺は今日、転校してきた秋橋 涙だ。知らんな、お前なんて」
平坦な声音で放つ言霊の刃。存外にお前なんて知らない、と伝える。
煽られた感情は既に平常へと戻っている。何の感情も呼び起こされない。

感情は月の引力によって潮汐する海と同じ。しかし、それは湖でもある。波紋が広がったとて、どうやって波が立とうというのか。水面は心を映し出す。水底は暗いのも必然だった。

「だいたい、顔も憶えていないような奴と重なるなんて——」

「なんで知ってるんだよ」

「？何が——……っ！」

指摘されてから自覚する。

今、俺は何を口走った？ 当人以外、知っていちやいけないことを言わなかったか……？

「7年前のことだ。随分昔だし、子どもの頃とは違ってると思う。

でも、そんなことじゃなくて、顔自体俺には思い出せない。」

「……」

「特徴のない顔。本人は覚えられにくい、って言ってたけど異常なぐらい覚えられない顔だった。直前まで会っていても、振り返って思えば顔が分からなくなる。そんな奴で、でも、そいつがそいつだと俺が証明できる唯一つは」

抗議も空しく利き腕を押さえこまれた。左で振り払おうとしてもう一方で掴まれる。簡単に無力化されたことに得体の知れない怯えが奔る。たった一つの失敗で導かれる真実に俺の動揺は最高潮に達する。

「やめ——」

「このペンダント。俺が、送ったものだ。手作りで、同じものを持つものはいない」

捕らえられた。服から引っ張り出され、胸元に揺れるペンダント。金のチェーンに通された透明な玩具のピンが俺には重い。それは“秋登”が持っているはずのものだ。“俺”が“秋登”だということを決定付ける明確な証拠。

「アキ——っ」

「知らないって、言ってるだろっ!!」

大仰な動作で腕を振り払い、言い逃げのようにその場を去った。その背を声が追う。けれど男自身は来ようとしなかった。そのことに胸が痛むことはない。当然だ。俺は遊びに来ているわけじゃない。心の警告に素直に従う。

“これ以上、アレに関わるのは危険だ”

俺は一人だ。友人も協調性もない。感情も不要。邪魔なだけだ。今の俺に最も必要なこと、それは目的を果たす。ただそれだけのために俺は存在する。

「俺は今日、転校してきた秋橋 涙だ。俺はアキという人物じゃない」

俺は繰り返す。そして否定した。

己に言い聞かせるように、感傷など抱かなくてすむように。声なき声で、真実を偽る。

記憶を頼りにして流れの途絶えた生徒の群れを急ぎ足で追った。同じ組と思しき連中を視認して、ようやく速度を緩める。思考の端に引っ掛かるものなど、忘れたフリをして。

俺は転入生の背を見送り、改めて思考する。

……転入生はアキ——秋登だ。

7年前、創の前から消えた親友である。心で確信する。

出会った頃の秋登は両親がなく、血の繋がった家族はお祖母さんと

なみだ

姉の泪^{なみだ}さんだけだった。祖母の経営する孤児院の子どもたちを家族

と呼び、幸せな、けれど区切られた世界に存在していた。それが小さな箱庭でしかなかったのをいつ気付いたのだったか。今でもその純粋な瞳と泪さんの綺麗な髪が記憶にはつきりと残っている。

お祖母さんが死んで、すべてが壊れた。子どもたちだけで上手いく訳がなくて、泪さんは国に連れていかれ、秋登はそれについていった。子どもたちもいつの間にか消えていた。

皆がいなくなり俺に残ったのは廃墟となった孤児院と約束だけだった。今は何もかもが遠い。

もう会うことはない、そう思っていた。——数年ぶりに見かけた秋登は変わっていた。名前が、声色が、俺を知らないという態度が、

……瞳が変わっていた。紅の、精彩を欠いた瞳。秋橋 涙は“秋登”であることをペンダントが教えてくれたのに。

……7年前だ、顔なんて変わっているだろう、性格も変わっているかもしれない。けど——。

勘が告げる。警鐘が鳴った。“アレに関わるのは危険だ。”——戦鬨における最も信頼の出来るもの。それが勘だ。それが告げる。

俺にとって一生ものの友たちだった。たった一人の親友だった。

今でも大切な人だ。答えなんて始めから出ているのに、選択肢なんて必要がないほど答えは決まっていた。

「秋橋、午前はこれで終わりだよ」

転校生である秋登に教えてくれたのは佐竹^{さたけ} 戻^{れい}だ。

この学校は特殊だ。学園都市はそれだけの特異性を伴うからだ。戦鬪に慣れさせ、L S^{ばけもの}と戦うことを義務付け、国へと献上される兵士の養成所。命を賭して世界を守るために集まった生徒たち。だからこそ転入生は珍しい。転入生である秋登に多くの者が視線を向けてくる。だが遠巻きにして話しかけてくる者はいなかった。いや、その隙を与える間もなく佐竹が来た。この同級生は生徒たちの中で確たる地位を取得しているらしい、と周囲の雰囲気から読める。

佐竹は「一緒にお昼どうかな？」と提案してきて、秋登は頷いた。

「午後は鍛錬だから昼は早めに切り上げないと時間がないよ」

佐竹はどうやら先ほども気にかけてくれていたようで、教室に戻るついでに色々説明をしようと思っていたらしい。それがあの男が話しかけるのを見て先に帰ってきた、とのこと。

生徒と教師しかない学園都市は親も世話役もない。一人暮らしが寮での共同生活。つまりはどっちにしろ自分の事は自分でやらなければいけない。制服にしわがついていたりほつれていたりするのが当たり前というような雰囲気さえある中、佐竹はキチツと正規の制服を着こなす。自由な校風故にどうか、戦鬪で邪魔にならないように制服の改造は許可・推奨されている。実際ほとんどがそれで転入初日である秋登でもやっているのだが、佐竹はそれが一切ないという完璧な優等生。転校生が最初に仲良くなる人物として佐竹は最高の人物だった。

ところで秋登は今、ある人物から視線を浴びせられていた。先ほどの男だ。名乗りもせず到手前勝手な感情をぶつけて激昂した人物。

視線を合わせれば向こうから外すかと思えば、そうでもない。男は観察するように度々目を向けるが、近寄ったりはしない。周りから見れば不審にしか思えない行動であることに気付いていないのだろう。イライラが募る。

鈍感なのだ。何事にも、気付いていない。自分に寄せられる好意も、敵意も、何もかも。そんな気持ちに気付こうとさえしていない。無意識のうちに視線を逸らしているとまで思える。

「佐竹、あいつ何」

最高潮に達したイラつきがとうとう口に出る。

「山戸 創^{やまと そう}。普段はあんなんじゃないんだけど、……風習に染まったのかな？」

首を傾げる佐竹の仕草は人目を集めた。特別な動作でもないのに注目を浴びるのは男だらけの教室で華やかさを身に纏う者の宿命、というやつだろう。

……“山戸 創”ね。

聞いた名に隠しようのない違和感を覚え眉が寄る。どうして創^{つくり}ではなく創^{そう}と名乗っているのか。けれどあえて話題を摩り替える。

「風習って？」

「聞いてないの？」と逆に尋ねられ、頷けばフム。とばかりに佐竹は考え込み、しばらくして答えが返ってきた。

「風習って言うのは本物の恋愛は希少^{きせう}ってことだよ」

「……。いや、わかんないし、それじゃ」

「特殊だからね、この学園」と言われてもならばその特殊を話してくれ、というのが本心だった。佐竹がはぐらかす話題。そのことに躊躇^{ちゅうちう}いが生まれる。これから自分の暮す場所のことだ、知っておきたい。変な沈黙が生まれる。佐竹は「食べながらにしよう」と無理矢理気分を変えた。既に2人は移動の準備は会話中に終えていた。

「ああ、そ——」

「俺が説明するよ！」

……うだな。

余計なことを言い腐って人の台詞を邪魔する奴を見る。割り込んできたのは横の席の男子生徒。立った拍子に音を立てた椅子をこちらに向けて座り直す。

「俺！雀 ユウ（すずめ ゆう）。よろしくっ」

元気よく挨拶をする姿は幼く見えた。14歳ぐらいか。雀は赤っぽい茶髪にふわふわした癖毛。子供独特の中性的な顔立ちが残っている。佐竹の綺麗な顔とはまた別の整った顔立ち。

美形が多いな、と素直な感想を抱く。

「たった今食事しながら、って帰結させた話題をわざわざ割り込んで話すんだ？」

時間を取らずな、という意味を皮肉たつぷり言外に告げる佐竹。雀は「わわっ待って！」と言って慌てて移動準備を始める。他の奴らのように怯まないのは天晴れ。2人のコミュニケーションはそれで出来ているらしい。というか佐竹が従えている様子。

「ここは厳しいからー女子どんどん減っちゃってー少ないんだよ！本当はもっと多いはずなんだけどねー。入学から今日まででも相当数が減っちゃって」

用意しながら話すとは、どれだけの執念。いや、主張か。

雀が話すとおり、ここの男女比率は7:3だ。だからこそ状況——風習は加速する。

「しかも女子は女子でも、貴族のこっわーい子女かムキムキでちょっと恋愛対象には……コホンッ！——そんなわけでっ！」

雀はいつしか佐竹を追い抜かし先導していたのでわざわざ振り返って、ズビシッと音を出しそうな勢いの指を立てる。秋登は間近すぎてブレているそれを見ると曲げたくてたまらなくなった。

……こう、曲がらない方へえいっ！と。……しないけど、ウザイよな。

「崇拜対象・憧れが過ぎて擬似恋愛になったりするんだよねー。学校機関だし遊ぶのも満足に出来ないから、鬱憤溜まった奴らが新しい遊びかゲーム感覚でさあ」

佐竹から白けた、いや突き刺さる氷の視線を感じたのか付け足す雀。
「だっていつても美形2人並ぶと絵になるーとか。話しかけられた、
キヤッ嬉しい！程度だし」

秋登は思考が危ないところに向いているな、と自覚する。イメージ
が“青春”的なドラマか映画しか思い浮かばない。感動、汗、涙、
熱血……と単語が羅列する思考。ムサイな。

「じゃれあいで抱きつく、とかボテイタッチが多めとかそんな感じ
か？」

雀の話し方が煩い。ついに行動も。周囲から向けられる興味津々、
好奇心旺盛な視線や大っぴらな誹謗中傷に交わされる噂、丸出しな
悪意の視線。それが秋登を苛立たせる原因だった。

「そうそう、フレンドリイ系。男ばかりの王様ゲームでキスしろ
って命令が出たーとか、女装命令されたーとか。そんな悪ふざけが
横行する感じ」

「だから大丈夫イ！」と親指を立てられる。いや、指立てられて
も「折っていいですか」ぐらいの言葉しか出ない。

「……まあ、それぐらいなら、な。でもそれって恋愛なのか？」

雀は基本無視。佐竹に話しかける。

「うーん、何とも言えない、かな。殆ど冗談で言っているようなも
のだよ」

佐竹も乗ってきて雀が嘔泣きをする。まあ名に因んだ行動なのだろ
う。ピーチクパーチクと五月蠅い。ちっちゃいし。いや、それでは
蠅か。

「まあ、仕方ない。こればかりは諦めるしかないよ」

あはは、と苦笑で返されて苦笑で返す。

「で、アイツはどうなんだよ。そんなフレンドリイとかじゃないん
だが？」

話が一段落したところで再び視線をやれば、山戸 創がいる。美形
が怒ると怖いというけれど、アレは怒っているわけでもないのに顔
が怖い。話を聞かれていたわけじゃないだろう。単に転入生は“秋

登”なのか、と疑っているだけで、ここの恋愛事情とは全く関係ない。

……ああ。昔の“俺ら”ならば、ここではそう見られたのかもしれない。

「アキ」

目が合ったのだ、秋登と。久方ぶりに会えた親友に感情が溢れるのに、それは逸らされた。それは塞き止められた感情の箍を外すのに十分な動作だった。

「アキッ」

思わず、近寄った。下に落ちた影を秋登が見つけ、見上げた。もう、止まらなかった。

疑問はいつぱいで、尋ねたいことも問い詰めたこともたくさんあった。でも、この7年間の感情は止まらなかった。思いの丈をぶつけるように身体を抱きしめる。

涙が、止めどなく滴り落ちていった。秋登に知らしめるための、罪を負わせるための、涙。卑怯でもなんでもいい。ただ、その存在が、凄く大切に。失って、なくしたことにさえ気付かないままだった。目の前にあって、手に入らないと思って、それからどれだけ大切なものだったのかを思い出した。今更ながらに自覚した。

「——っ放せよ！」

気付けば真上に影が落ち、抱きしめられていた。自身を拘束する腕を無理やりに解こうとして、気づく。幼い頃でも敵わなかった力が、今でもびくともしない。男らしい身体つきに腕力、変わらず振りほどけない己の体格が憎くなる。昔とは違うはずなのに。思ったのは一瞬。それ以上に、衝動に近いものが背筋を駆け上がった。

「触るな変態！」

創を投げ飛ばしていた。無意識に鳥肌の立つ腕を擦る。

「……」 「……」

佐竹と雀からの視線が痛い。ビシバシと当たっている。感動の再会じゃなかった。

秋登は腕力ではなく実力で振りほどいた。なのに創の中では何も成長していない。2人の絶対的立ち位置は変わらない。守られるだけの、弱い自分のまま。――否、“秋登”も、“創”も変わった。年月は2人を変えた。だから今、2人はこんな所にいる。あの頃のままでは、いられない。実力を付けた。秋登はもう、創より強い。既を守る側に立っている。

「……すまん。つい、条件反射で」

投げ飛ばした先、無様に壁へと激突した創に対しそう言って慰める。秋登は自分で言っていてその言葉に違和を感じた。条件反射、などと。

「アキ！」

急にガバツと顔を上げて伸ばされる腕。創は殴り飛ばされたことにも何も感じずにいるのだろうか。周囲からの目線にもめげず、秋登を抱きしめる。創の行動一つ一つに反応する周囲。増えた悪意の視線、いや殺気。

……それでも、肩口を濡らす水が、乾くまではせめて。

昔を、懐かしみたい。懐かしませたい。悲しみを吐き出させたい。

このまま、自由に。

だが抱き締め返す腕はない。両腕は力なく、垂れたままだ。そんな資格、ない。

秋登は“捨て”た。あの場所を、あの過去を。涙も感情も消し飛ばしてここまで来た。“秋橋 涙”を名乗り、以前と違う姿で今ここにいる。

――それはお前も同じはずだ。

“山戸 創”と名乗るからには、秋登の知っていた“山戸 創”ではない、けれど口に出すことは出来なかった。あの日の綺麗で悲しい涙が思い出されるから。何も出来ない。秋登に、幸福へ足を踏み出すことは許されない。

拒絶するほどの強さも勇気もなく、身動きすら出来なかった。無力なのは強くなっても同じ。相変わらず、秋登の周りで命が途切れていく。

……だから俺はこんな自分が大嫌いだ。

「で、具体的に鍛錬ってどんな授業なんだ？」

食堂へ向かう途中、俺は上機嫌だった。けれど秋登は不機嫌だった。原因は自分だ。佐竹へとかけた疑問にも疲れが見えている。それでも秋登を開放するつもりはない。創はわかっていて、その背を抱きしめるようにくっついていて。離れた間の年月分のコミュニケーションを取る。本人は引き剥がそうと労力を費やしていたが、全くの無駄である。先ほどは返り討ちにあつたが今回はそれもされてない。

「授業というより自習の面が強いのかな？ 訓練所の一角で行うんだけど、仮想空間で各々戦闘シミュレーションや身体作りメニューを実行して過ごす。大部屋があるから、複数人で利用も可能だよ。ネットで通信もできるから、会話や一時的な介入なら大部屋に行かなくてもいいんだ。午前授業で使う時は全ての回線を繋げちゃうんだけどね」

「一緒にやろうぜ」

せっかく入った会話を無視され、あげくに顔をぐいーっと押しやられた。頭一つ分小さい秋登が手を伸ばす様は自分が虐げられていることを覗いてもほのぼのする。

「ああっ！！山戸様っ！！」

——ああ、置いてかれる。

そのことに気付いて、身体は急激に冷める。心もそうなりそうで怖かった。だから、手を伸ばす。受け取ってくれる手はないけれど、それでも必死に伸ばした手は届いた。

心は恐怖に捕らわれることなく、手は秋登の制服を掴んでいた。振り返ってはくれないけれど、喜んで迎えてはくれないけれど、それでも旧友は今でも拒絶しないでくれる。

それが嬉しくて、それだけが真実だった。疑問なんて、片隅でい

い。例えば、『泪さんはどうしたの?』と7年前のあの日、会ったのなくなった起因の日、彼は彼女を追いかけて行った。だからこそ知りたい。でも、今は、『秋登がここにいる』それが答えだ。それ以外にない。

「で、教師は?」

秋登は佐竹に質問を続けた。佐竹の表情は若干引きつっていたがきちんと言えてくれた。

「あ、ああ……。教師は基本的に空間内へ干渉することはない。ただ、映像は送られるし、不審な行動はすぐ分かるようになっていて成績もそれで決まってくるし」

観客は完全除外で制服の裾を握ってくる七転び八起きに秋登は感心半ば呆れた。しかし無視。歩きにくい行為を強行する奴はスルーしていい決まりだ。

「サボれないってわけだ?——そちらの雀くんは先ほどからどうしたんだよ」

始終ソワソワと窺うようにこちらを見てニヤニヤしているのがとてもウザかった。

「山戸さんっ!私、あなたが——」

「山戸様!私のことを知ってもらいたいです……っ」

「ずっと前から好きでした!」

「初めて会った時に確信したんですっ」

「一目ぼれなんですっ」

離れた物体に群がる生徒どもに創は囲まれた。そして始まった告白大会。秋登は創に掴まれていた裾を払い、巻き込まれるのを回避。動けなくなった創を他所に3人は進んでいく。

「えっ!? いやだって、『あの』山戸が懐いてるしー気になんだよねっ。聞きにくかったんだけど、俺の好奇心がーっ!ー!」

……テンション高いな、おい。

佐竹と違いすぎだ。これでよく友達やっていける。2人が幼馴染と

いうことに吃驚だ。「ガーガー」とエコーを掛ける雀は話題の人物を置いていつていることに何の感情も覚えならしい。振り返ることすらない。否、集中すると周りが見えなくなるタイプで気付いてないのか。

「はいはい、わかったから熱を下げるよ」

喚く雀は破壊力抜群だ。佐竹が頭を抑えている。周囲も同調するかのよう騒ぎ立てはじめる。創が戻ってきたようだ。屍となって。

周囲が興奮する理由はもちろん、秋登。そして創のせいでもあるようだ。

「謎の転校生現る！」という傍迷惑な新聞を出して生徒どもに見せ回ってくださりやがった輩がいたようだ。授業をボイコットまたはサボタージュをしてまで書いたのか、先ほどの情報も入って配られた。(＋揭示) のための注目ではあるが、雀が(叫ぶ)目立つせいでもある。

会話の内容は聞きかじるに、雀と佐竹が仲いいだとか、創がかっこいいだとか……。佐竹や雀は創と同様、何かと注目される人物である。成績や戦闘スタイルにしても容姿にしても、人気があったりする。秋登のせいではなかった。

「はたしてその関係は!？」

マイクを持たない手でリポーターのように秋登へ質問するが、答えは味気ないものだ。

「知り合い」

「切捨て!？」

「うっさい」

おおー的確。佐竹はギャーギャー騒ぐ雀に一蹴。バコンと良い音が鳴った。これこそ切捨て。

食堂の大きく開かれた扉を潜る。騒然とした空気が身に触れ、一瞬体が拒否した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459y/>

sky ash

2011年11月10日03時15分発行